

教科内容をグループ学習で
－「ゴルフボールの授業」をてがかりに－

成瀬徹（愛知・猿投農林高校）1995.9.23

- I. はじめに
 1. 「教科内容研究」は教師論
 2. 「ゴルフボールの授業」を手がかりに
- II. 僕の遍歴
 1. 現実とのギャップに悩む暴力教師
 2. 朝も早よから
 3. 草刈りで職場づくりを
 4. 光が見えた
- III. ゴルフボールの授業から
 1. こんなのでいいの「ボールの授業」
 2. 社会的有用性
 3. 実践の概要
- IV. 実践をどのように総括したか
 1. 「文化」と子どもの出会いは撃的
 2. 学校に授業研究のウェーブを
 3. 榊原ショック
 4. 「落としどころ」の設定ミス
- V. 今度やるとしたら
 1. 内容の構成
 2. 授業の進め方
- VI. まとめ
 1. 「教科内容研究」
だからこそ「グループ学習」を
 2. あなたに褒められたくて

教科内容をグループ学習で
－「ゴルフボールの授業」をてがかりに－

成瀬徹（愛知・猿投農林高校）1995.9.23

- I. はじめに
 1. 「教科内容研究」は教師論
25年間の教員生活のなかで今が一番楽しい。それは、ボールの授業とか、ゴルフボールの授業とかにかかわっているからです。
教科内容研究というのは、教師論でもあるということがストーンと腑に落ちました。それは、また後で話をしていきます。
僕の実践のベースとしては愛知支部での跳び箱研究です。「跳び箱なんかやめちまえ」をテーマに、跳び箱の歴史や文献を当たってきて3年になります。それを群馬大学で行な

われる体育学会(10/6)に愛知支部の支部研究として発表します。

そういうことに関わって「教科内容研究」は、「教材で何を教えるのか」だけの問題ではなくて、先生という仕事が「何のために」「何を」「どう教えるのか」という1つの教育の始めから終わりまでの過程を全部自前でやるということがストーンと腑に落ちたのです。

今までは、一番極端な場合でいえば、教育の「目標」や「内容」は学習指導要領で示しています。教員のやることは「方法」の部分だけでいいということがあったと思うのです。「方法」の部分だけ一生懸命する。一生懸命するのだけれども、なんだか教育の過程の一部分だけを一生懸命頑張っているように思います。

同志会で、系統性研究などの成果を頂いて、それを自分の学校に戻って、どういう風にこなしていこうかと思っていました。でも、それは、ある意味では指導要領の中で生きているみたいなものでした。

しかし、「教科内容研究」が始まってから、「何のために」「何を」「どう教えるのか」という全過程を自分で、自前でやるということが自分にストーンと落ちてきて、「教員やって楽しかったなあ〜。本当に教員をやってよかったなあ〜」と思えるようになりました。

いろんな場面で「今、僕は一番楽しいよ」と言います。後で、ちょっと僕の遍歴を語ります。遍歴の中ではいろんなことがありましたが、とにかく最高の年を送っています。それがもう少し早ければよかったなあと悔やんでいるのですが、今からでも遅くないです。

2. 「ゴルフボールの授業」を手がかりに

そういう中で一つの転機になったのが、「ゴルフボールの実践」です。今日は、「ゴルフボールの実践」報告ということではなく、そのことを踏まえて自分がどのように総括したか。ゴルフボールの授業に何故行きあたったかということやその実践を通じて学んだこととお話をさせて頂きたいと思います。

これは雑誌『たのしい体育・スポーツ』の11月号に原稿を書かせて頂いたもので、それに殆ど準じた話になると思いますので恐縮です。この夏大会で注目の実践ということなので、『たのしい体育・スポーツ』の方から依頼がありました。そこで、この実践を自分なりに総括して「注目してほしかったこと」ということで書きました。その中身が今日の話なのです。

この実践報告を通じて、「教科内容をグループ学習で」というところにつなげていければ有り難いし、嬉しいなと思います。

II. 僕の遍歴

1. 現実とのギャップに悩む暴力教師

(1) 燃える初任時代

最初に、僕の遍歴ですが・・・。

1971年に大学を卒業して、先生になりました。赴任校は、「猿投(さなげ)」といいます。猿が投げると書いて「さなげ」と読みます。そこに書いてありますが、猿投に3回も行っているんです。これは歴史的なことで同じ学校に3回も赴任していることで、愛知県下の笑い者と言われていています。農業高校の先生はほとんど異動がありませんので、新任の

頃の先生と 87 年も現在もいっしょで、ほとんど農業高校の先生とは顔見知りです。

まず最初に農業高校に赴任して、現実とのギャップに悩みました。同志会との出会いはすごく早くて、20 歳の頃です。学生の頃にまだ中村敏雄先生が東教大付属高校で若くして頑張っていた頃にあって、金曜学習会だとか、集会に出させてもらっていました。

だから、教員になって同志会の実践をかじっていただけだったので是非やりたいなとか、いい実践をしたいなとか思っていたのですが、現実とのギャップに本当に悩みました。

(2) 格闘の日々

生徒と格闘して・・・そんな毎日です。血だらけになって喧嘩したり、殴りあったり、眼の上に傷があるのですけれども、田んぼの中で大立ち回りをして交番の人や村の人が飛んで来て、役場の教育長に呼ばれて怒られたり、そんなことがいっぱいありました。

夢はすごく持っていたのですけれども、現実はとてもその授業ではない。相手が来てくれないし、こちらの力もなかったのです。とても授業を実践しようとしてもできなかったのです。

2. 朝も早よから

(1) 中野先生との出会い

それから、豊田工業高校に転勤しました。そこで出会ったのが中野勇という先生で、逸話のいっぱいある人です。その人は部活動、ラグビーをやってる人で、授業は出てこなくていい、部活動さえやっていたらいいんだという感じの人です。

その人が最後にはグループノートを生徒に書かせるようになるんです。その間、12 年間。この人とは本当に格闘しました。例えば、この人は朝が早くて、6 時半か 7 時には学校に来て、もう 1 時間目の授業の準備をしている。8 時頃学校に行くと、「あんたはいいわな。遅く来て生徒にやらせりゃいいんだから」と言われるんです。生徒にやらせるのが勉強だと思うのだけれども、この人に勝つにはこの人よりも早く学校に行かなければ。あの人が 6 時半に行くんだったら、自分は 6 時に行こうと。そして、この人より絶対遅く帰ろうと心に誓いまして、ずーっとこの人に付いて回ったんです。

この人を超えようと思い、この人が準備するなら、この人の前に準備しよう。体育館のモップかけをあの人がするなら、その前にしようと思ってやってきました。

(2) 血の気の多い青年将校からの脱皮

そういう中で、授業づくりも一緒にやる話になって、教育課程づくりに結びついていきます。

単に自分が好きな授業をやるだけやって、そして子どもと教員の間に 1 対 1 の関係ができで、子どもが喜んでくれても、学校はちっとも変わらない。体育科は全然変わらない。そんなことに、この豊田工業に行って初めて気がつきました。

73 年までは僕と子どもの世界です。豊田工業高校に行って初めて職場というものが、また職場を変えていくには血の気の多い青年将校ではダメだということがわかりました。

やはり、どんな手を使っても勝てばいいんだ。だから朝、体育教官室でコーヒーを入れ

て掃除をして、うまくいくんだったら、それも闘いじゃないかということを知りました。

それがこの先生に一番学んだことです。もう今年退職されるわけですがけれども、退職にあたって「あんたと二人で酒を飲めりゃいい。俺の退職はそれでやってくれ」と言ってくれます。

そういうことで、僕の枠がひとつ広がったなあと思いました。

3. 草刈りで職場づくりを

(1) 僕のあだ名は「草刈正雄」

そこに 10 年間いて、再び猿投農林高校に来ました。ここでも豊田工業で使った手を使いました。

農業高校ですから、グラウンドには芝が生えていまして、それを体育科が管理しなければなりません。そこでグラウンドの草刈り、芝刈りが仕事になりました。農業高校なので、トラクターなどの機械がたくさんあるのです。それを 3 年間でほとんど全部乗れるようになりました。

朝早く来て、グラウンドに水を撒いたり、草を刈ったりしていました。そのうち、農業の先生が僕を認めてくれるようになりました。彼らは動いている先生をととても認めるんです。助手の先生がととても多いですが、そういう人に「先生、ちょっとこのトラクターの動かし方を教えて」と聞くとしっかり教えてくれるし、いろいろやってるのを見てるからしっかり応援してくれくれます。

「あっ、これだ！草刈りで職場を作ろう」と思って、まず、そこからスタートして、草刈りばかりやっていました。今、三度猿投農林高校でやっていますけれども「草刈りで職場を作ろう！」ということで、当時の僕のあだ名は「草刈正雄」と言われていました。

(2) 財産の食い潰し時代

ところが、ここで授業実践がまったくできなくなってしまったのです。自分の実践がまったくできなくなってしまいました。「何やってんだらう俺は」と、この猿投農林高校にいる間、ずーっと不調になってしまいました。

それは、今考えると技術指導の系統性だとか技術指導とグループ学習を結びつけてやってきた中で、次が見えなかったのです。次の「教科内容研究」というのが見えなかったのです。だから、「うまくするだけでもおかしいしなあ。他に何かないのかなあ」と迷っていたのが、この第 2 次猿投農林高校時代です。

(3) 行事に燃える

ただし、クラス担任として楽しく過ごしました。また、生徒会の顧問として体育祭の改革にも取り組みました。例えば体育祭で（農林高校ではかなり生徒も荒れていて、自信をなくしている生徒が多いので）何か自信になるものを見つけられないかと取り組みました。

まず国旗掲揚をやめようということで、掲揚台が腐っていたので、それを切ってしまいました。職員会議では「掲揚台がないのでやめていいですか？」「賛成。賛成」という具合です。

いつも草を刈っているから、そのことで文句を言えないんです。草を刈っているおかげ

で国旗掲揚がなくなって、それから今までずっとこの学校は体育祭では国旗掲揚がありません。

それからもっと楽しい内容にしようということで、授業で田植えラインをやっているのを競争にしました。1分間で何本植えられるかとかです。それから林業科があるので、丸太切り競争などうちの学校でしかやれないようなことをやろうと体育祭を改革していきました。

クラス担任としても農業に関係したことをやろうと文化祭では炭焼きをしました。炭焼きというのは、火の番をするために一晩泊らなければいけません。でも、学校側は泊ってはいけないというので、「よし、夜の12時まで仕事をしよう。そして朝1時に学校に來い」というようなことをやりました。

こんなふうに、体育祭や文化祭の改革などをやっていましたが、やっぱり心の中では「体育実践がなかなかうまくできない。今までの遺産を食ってるだけだ」という感じの時期でした。

4. 光が見えた

(1) 体育科学習会の組織

その後、90年に三好高校へ。これは体育科のある学校でした。16人体育の教師がいます。何とかうまくやっていかなければということで、体育科の中で学習会をしようとしたら、やっと4年目に実現できました。

体育科といっても部活の学校です。部活さえやればいいという感じなのです。そんな中、体育科として「体育の授業のことや体育のことで悩みましょうよ」と考え始めました。そのこととちょうど跳び箱研究が重なってきました。

それと同時に体育科だから、体育理論という授業があります。そこで、ちょっとやることが見えてきたのだと思います。辛い時期でしたが、光が見えてきたように感じました。

そんな時、89年の京都大会で、則元さんと初めて出会いました。出会ったところはやはりステージです。でも、それは踊りじゃなくてシンポジウムでした。そして現在に至っています。

(2) 体育理論の授業を

体育理論の授業をやろうという気持ちになったのは、90年の頃からです。当時、構想したのが「黒人スポーツの歴史」です。例えば大リーグのセンターラインには黒人がいない。ピッチャーやキャッチャー、セカンドには黒人がいない。そんな問題を扱いながら人種差別の問題を扱ってもおもしろそうだということです。それから孫基禎のことです。孫基禎の問題を押さえながら、自決権の問題を扱ってもおもしろそうだと構想しました。

それから地域のスポーツ施設を調べる中で、愛知県の豊田市というところほとんどトヨタ自動車の近くの学校なんです、トヨタ自動車の会社の施設は素晴らしいのだけれども、豊田市という公共団体は全然金を出していないということがわかってくるのです。

そういった構想をずーっと出して、やっぱり、世の中のおかしさとか、体育行政のおかしさとか、人種の問題とかそういったおかしさをいっぱい打ち出せると思ったのです。

Ⅲ. ゴルフボールの授業から

1. こんなのでいいの「ボールの授業」

そんなことを思っていたら、山口大会で出原さんが「ボールの授業」を提起されました。「思想」もなんにもない「ボールの授業」。これでいいのかなと思いました。もっと、民族自決権、人種差別、スポーツ権など、そういうところに迫るような授業でないと授業じゃないんじゃないかと思いました。

ところが出原さんは「そんなのは基礎的認識でいい。そんな告発的な授業はやめなさい」と言うのです。でも、それは納得できないということで、中村敏雄先生に「出原先生の授業は刺激的だったのだけれども、わからない。これがボールですよと言ったって意味がないのではないか」という手紙を出したのです。

2. 社会的有用性

それからというもの中村先生からいろんな手紙が来まして、手紙のやり取りをする中で、まず、一番初めに書かれていたことは、「ボールの授業はおもしろいんですかね。これがサッカーボールで、これが何ボールかということでは物知りをつくることにだけになりませんか。何か社会的有用性ということが大切ではないのか」ということを示唆いただきました。

知ることによって、これが社会にとってどんな意味があるのかがはっきりわかることが大切ではないかということです。ボールの授業は確かにおもしろいけれど、その社会的有用性という部分では何もないなと思いました。ただ、ボールを分類するだけではないか。その時には、そう思っていました。

じゃあ、ボールのことを考えていたら社会的に意味のあることが見つからないかと考えたのが、ゴルフボールの授業です。ゴルフには自然破壊とか、お金とかいろいろ問題があるからです。

3. 実践の概要

(1) ゴルフボール収集

それから、ゴルフボールのことをちょっと勉強し始めました。ゴルフをやったことがないのですが、ゴルフボールをちょっと調べ始めたらおもしろくて、ゴルフボールを、今たくさん集めています。

(2) 鶏からフェザーボール

「授業をやる前に教材研究を！」ということではいっぱいゴルフの資料をあつめました。その実践の結果は夏大会に報告したので詳しく言いませんが、ひとつ簡単に言えばゴルフボールというのは最初こんなボールだったのです。(実物を見せながら) これは、フェザーボールといって鳥の羽根でできていて、この羽毛を何回も煮て乾かして皮に詰めたものです。これは本物ではありません。僕が作ったものです。

農業高校で、学校にたくさん鶏がいますから、鶏の落ちている羽根を拾っては集めました。40 g ありますが、40 g の羽根を拾って集めるのはたいへんなことです。それで最後には鶏を捕まえてギャーギャーいうのをむしってハゲにしてしまい、それを食べてしまい

ました。

その鶏は卵を産まなくなってしまった廃鶏です。廃鶏というのは廃棄の廃ですが・・・。廃鶏にした鶏を 20 数羽もらってみんなで食べてしまいました。その鳥の羽根を野球の皮に詰めたものです。

(3) 傷つきガッタパーチャ

それからこんなボールもゴムからできます。ゴムが南米からマレーシアに輸入されます。これは盗まれたという説もあります。そのマレーシアにあるのをイギリスでボールにしていくわけです。

それは（実物を指して）、ガッタパーチャというゴムでできたボールです。そのうちに、少し傷ついた方が飛ぶんじゃないかということが経験から明らかになってきます。これが傷つきガッタパーチャで、落としたらはずみ方も同じですがこのように発展してきます。

(4) ラバー巻きボール

それから、これはゴムを芯にしてその上をラバーで巻くというアメリカのボールで、ハスケルという人が考え出しました。今のボールと感じとしては変わらないのです。変わらないけれども、今のボールを落とすとこんな音（カツーン）がして、これはこんな音（ゴツン）がします。

アンティークショップで買ってきたのですが、1つしかありません。中身を切ってしまったらどうなっているのでしょうか。2つあったら切ってしまうのですが・・・。

それが今のボールみたいに変わってくるのです。

(5) ツーピースボール

今は、中身もいっぱいあって、例えば（切ったボールを見せながら）、上の表面と中のラバーの合成樹脂が二重になっています。これをツーピースボールといいます。

これは、コア（核）がありません。ですから、ワンピースボールといいます。

(6) スリーピースボール

それから、もう一つは中にゴムの固い芯が入っていて、そしてゴムの糸が巻いてあり、それからコアがあります。これをスリーピースボールといいます。

この三種類あると聞いてゴルフボールを切り始めるわけです。ボールを切るのは簡単と思っていたのですが、表面にこれがワンピース、これがツーピース、スリーピースというマークがないし、切ってみないとわからないのです。

(7) 自分の指を犠牲に

林業科がありますから、丸ノコで切っていきますが、はねたりまっすぐいかなかったりして難しいわけです。仕方がないので、万力に挟んで切っていました。ボールを切ってみようと思っている人は、これだけは気をつけて下さい。スリーピースだけは切っている時 5 m ぐらい飛んできますから、顔に当たらないように注意して下さい。

切っていたのですが、なかなか切れないので始めバイオリン状態で切っていたのをあと

少しだと思って、大根おろし状態で切っていたら、指まで切ってしまいました。

ゴルフボールの中身を見たり、アンティークショップでこんなものを買ってきたりすることは楽しいものです。先に見せたガッタパーチャは実は嘘です。本物ではありません。自分で作ったものです。

何で作ったかという、資料の9ページにあります。これはどこかに売っていると思うので使って下さい。ラバースカルピーという合成樹脂が売られています。それを固めて、レンジで30分位あたためると、後は色をぬるだけです。穴をあければ今のボールの偽物ができます。丸くするのは大変ですが。

(8) どんどんマニアックに

この際だから、ゴルフについて何でも資料を集めようと思ってたくさん集めました。例えば、こんなボールもあります。普通のボールは穴があいていてディンプルと言いますが、これは逆です。プランプルと言います。普通のゴルフボールはへこみがありますが、これは出ています。

阪急百貨店でセントアンドリュース展をやっていると聞いて、いろんなグッズやセントアンドリュースのボールを集めてきました。それから、ゴルフファンにはなかなか人気があるティーというのも集めました。家に帰るとこの他にもたくさんあります。今日持ってきたハンカチもその中の一つです。

こうやっていろいろ集めていくうちに、授業も大切だけれども、集めること自体が楽しくなってきたわけです。どのように授業をやったかということについては、資料の3ページの下から8ページまで6時間分の内容がそこにあります。ビデオを起こして作成したものですから、ほとんど本物の言葉が書いてありますので、読んでいただくとわかると思います。大きな流れだけいいです。

(9) 僕のまちがい

まず、資料の1ページ目、ゴルフボールの歴史とゴルフボールの構造。2つ目にそのゴルフボールが変わる部分によって何が変わったのかです。

後でふれますが、僕はここでとんでもない間違いをするわけです。「ボールが飛ぶようになるとゴルフ場がもっと広がる。スコットランドみたいな平原だったらいいけれども、日本のようなところでボールがどんどん飛ぶようになると谷を埋め、山を削り、自然破壊につながって行くんじゃないか」という話で終わったんです。

これはあとで間違いだと気づきます。最後は、自然保護つまり、中村先生の言う「社会的有用性」とボールの発展とを自然破壊につなげて行く、そこへ結びつけようとしていたのです。かなり強引だったと思いますけど。

中村先生が言われた「社会的有用性」というのは、「ボールがこう変わってきたんですよ」で終わるのではなくて、科学技術とのかかわりとか、ゲームの発展とのかかわりとかを追求していくことが必要だといってるのに、それを自然破壊に結びつけてしまう。ここがすごく間違いと後で気がついていきます。

いろんなご意見もありました。とにかくボールが変わることによって自然が変わるという種目が他にないかということやバスケットボールが変わることによって自然環境が変わ

ったなんて聞いたことがないし、野球のボールが飛ぶようになったから自然破壊が起こるようになったなど聞いたことはありません。

それで、これは僕独自の問題だし、「やらないかん」ということで自然保護と結びつけてやりました。

(10) プランブルボールとディンプルボール

さっきからプランブル（でこぼこが表面に出ているゴルフボール）がみなさんの机の方を回っていますけど、あれは知多半島の沖に「篠島」という小さな島があるんですが、そのゴルフ場で使っている飛ばないようにするためのボールです。

ディンプルボール（くぼみがあるボール）はなんのためにあるかということ、遠くへ飛ばすためにへこませているのです。なぜ飛ぶかという資料は、NHKのウルトラアイで出た資料（資料 p.10）に書いてあります。その中に書いてあるのですが、このディンプルというのは、遠くへ飛ばすために、初めはキズから始まり、だんだん発展していったのです。

また飛距離をどうしたら小さく出来るかということで、ディンプルの逆で、でっばったプランブルボールを使うことによって、狭いところでもできるという「篠島」の資料を紹介して授業を終わって行くのです。

IV. 実践をどのように総括したか

1. 「文化」と子どもとの出会いは撃的

(1) 「実用主義」的学習内容から知的好奇心へ

さて、そういう授業の中で、どんなことを総括したかということ、まず文化と子どもとの出会いが非常に衝撃的であったと思います。とにかくこんなことは学んだことがないのでから。学んだとしても親父から、ティーショットはこう打つんだよとか、クラブの握り方は・・・というふうに、教わるんです。でも、ボールについてとか、ボールの歴史とかについては教わったことがないからです。

そういうことを子ども達が発見するということは、すごく衝撃的です。これは予想以上です。レジメでいうと、黒くつぶした四角（■）は、どちらかというといい総括。白いの（□）は、僕の反省点と考えています。

まず学習「観」に大きな影響を与えました。子どもの感想文を少し述べていきたいと思っています。

「多くの謎に思えることがある。多くの謎の一つが、どうしてゴルフボールにでこぼこがあるかだった。でも、やっと解けた」

そして、次のところが大事です。

「その答えを、本やテレビでなく学校の授業で知るとは思ってもみなかった」

学校に対して彼は、全然期待していないんです。時間がないから詳しく説明できませんが、実業高校の授業方法は本当に即戦力の授業に変わっています。就職のために役立つ。就職試験に合格するための書き取りテスト。それから、資格試験。家庭科の授業で言えば、1分間で大根を何枚切れるかが検定になっています。実業高校の学力が実業的な内容に変わってきています。

だから学校の授業に期待していない。それが学校の授業で知ることとは思ってもみななかったわけです。

「ふつう体育の授業と言えば体育のことで、スポーツのルールや体の仕組みでなのだけど、これなら大いに大賛成だ。それにこういう授業で僕のように多くの謎が一つでも解けて喜ぶ人がいるのなら、これにはノーベル賞をあげます。普通ならゴルフのボールの歴史なんか知る機会がないけど、農林高校の生徒は間違いなくやつらより（ここでやっぱり自信を持ちたいんですね。）多くの知識があるので、大いばりであと半年くらい教室での授業に大賛成だ」

これを実用主義的学習内容から知的好奇心への一つの発展だというふうにとらえています。

(2) 体育の新しいイメージ

それから堀君の感想を。

「教室でやる体育というのはほとんどないのでどういう授業だろうと思っていました。目の前に現れたのはボールでした。いつもさわっているようなボールから全然知らないボールまでさまざまでした。こうしてみると知っていそうで知らないことというのは以外と興味をそそるといえるのか、知りたいといえるのか、気持ちが高ぶるといえるのか、とても授業を受けるという感じが変わりました」

これは僕のしゃべり方とか僕個人の問題じゃなくて、中身の問題だろうと思います。教科観にもインパクトを与えました。それから加藤さんの感想ですが、

「見るだけなら簡単ですから、きっと先生の見て、考え、理解する授業でたのしく学べたと思います」

実業高校の授業というのは暗記です。「覚えなさい」です。それが「見て考え理解する」という意味で「あっ、学習というのはこんな風にするんだな」とインパクトを与えていると思います。

宇井君の感想では、

「今まで体育で授業をやったことがなかった」（おいおいおい俺ずーっと授業やってたぜ）というように授業と思ってないんです。自分が受けたこれまでの内容とは「ちょっと違うんじゃないか」というように、やっぱり何かのインパクトを与えているようです。

(3) プレイと歴史の関係批判

しかし、一般的にはこれがこれからの課題かなと思うんですが、

「自分はゴルフの歴史をおもいうかべながら、楽しむなんてことは、したくないし、できない」

自分のプレイとゴルフの歴史を学ぶことがどのようにドッキングするのかということですが、でも、上のように書いたということは何かのインパクトを与えているわけです。このような教科観、学習観に関するものから歴史観に関するものもあります。

(4) 発展途上としてのスポーツ・ゴルフの見かた

鈴木さんの感想で、

「自然との共生ではじめにもどるといのは、いいことだと思った。子供の頃は、友達と誰に教わるということもなく、どれだけ遊んでもあきることなくすごせていた。けど、今は誰かにおそわったゲームをそのルールでやることしかできない人間にいつのまにかなっていたので、はじめにかえるとおもしろいことが発見できるかもしれない。今の私にはどれだけはじめにもどれるかということが大切だと思う」

この子は、文章を読めばそのままですが僕には今の状況がわかるんです。実は小学校まですごく優秀な子でした。ところが中学校から家庭の事情でおかしくなって勉強しなくなり、今農林に来て何か自信を持たずにいるのです。「もう1回はじめに戻りたい」といのは、はつらつとしていた昔の自分に戻りたいという思いがずっとあるんです。「今の私にはどれだけはじめにかえられるかということが大切だと思う」ということが重なるんです。それもボールの歴史、ゴルフボールの歴史を学ぶ中で、与えたインパクトじゃないかなと思うのです。

・・・等々の衝撃をこの授業は与えたと思っています。

2. 学校に授業研究の

ウェーブを

(1) 授業に皆を巻き込む

2つ目には、学校に授業研究のウェーブを起こした。職場づくりを前は草刈りでやっていたが、最近は授業でやるようになりました。「草刈正雄」でなくて授業でやるのです。

授業にみんなを巻き込んだので、学校の中で僕から声をかけられなかった人はいません。ボールを縫うのに自分でタコ糸がいいとわかっていたのですが、わざわざ家庭科の先生に聞きました。「どうしたらいい？」と聞くと「どうしてそんなことするの？へえー」と話をするのです。

作文を書かせると、国語の先生の所に持って行って、「この作文書いたんだわ。どういうふうに戻していく？」と聞きます。また、棒を切るときにはノコギリで切るとわかっているも林業科の先生へ「これ切りたいんだ」とわざわざ聞く。聞きに行けばやっぱり教えてやりたいですよ。

特に農業科の助手の先生は中学を出てすぐなられた方もいますから、人に聞かれるのが、すごく嬉しいんです。「これ、どうしたらいい？」「教えて下さい」ということで職場がうまくいくなら、何でもやりますよ。

とにかく、授業にみんなをまきこみました。

ラバーズカルピーを作る時も家庭科の先生に聞きました。家にレンジはあっても、わざわざ学校でやるのです。学校中、僕がゴルフボールの授業をやっているのを知らない人はいないのです。

今やっているのは、やり投げです。藪へ行って竹を切ってきて、クラスの子どもの分を教室の後ろへガバツと置いておきます。すると、いろんな先生は「何よ、あの竹は」と聞き、僕は「やり投げだ」と言う。みんなを巻き込んで相談を持ちかけました。

(2) 「グラウンドでやる数学」の出現

そうしているうちに「先生、おもしろいことやっているね」となってきます。そして「教室でやる体育」じゃなくて「グラウンドでやる数学」が出現しました。

数学の先生が、「微分・積分」の授業をグラウンドでやりたいと言うのです。スピードが上がって、落ちて、また上がっていく 50m のスピード曲線を（こんなグラフが出来ますが）使ってやりたいと言うのです。

いつも、相談を持ちかけていますから、そういう授業をすることを話しているのです。そうすると、「僕も、算数ではなく数学を、それも高等学校の数学をやりたい。しかも、予備校でやる数学ではないものをやりたい」「なにか、微分・積分を教えるのにいいものはないか」と数学の先生。

「こういうスピード曲線があるけれども、使えるか」と言ったら、「あっ、それだ」と数学の授業をグラウンドでやるんです。そんな動きも出てきました。

(3) 「教科としての危機」は

体育だけではない

教科としての危機は、体育だけではありません。今、危機と言われているからこそ、体育とは何か問われているのですが、数学でもそうです。愛知県に河合塾という大きな塾があります。そこが学校法人化すれば、子どもたちはおそらくみんなそこに行ってしまうでしょう。うちの高校で数学を教えているけれど、そこの方が、よっぽど受験に役立ちます。受験数学は、予備校の方がよっぽどちゃんとやっているのです。

うちの高校のレベルはこの程度です。だからいきおい、実業高校の先生は、ひどい先生になると教室へ行って、「九九を読め。九九の練習」とやるのです。九九を全部やれない子もいるんだけれども、九九を言えと言われるとすごくプライドを傷つけられます。子どもたちは、やっぱり数学をやりたいのです。でも、本当に数学のことをわかっていないと数学を教えることができないのです。算数になってしまいます。でも、算数では駄目なのです。

国語の先生は、書き取りだけやる。でも、それも駄目なのです。文学の授業をやらなければいけないのです。

だけど、むずかしい受験の数学のようなものは駄目です。それで、先生たちはこんなやり方をするのです。もうあの子たちは「数学はいらんぞ」と思っています。

家庭科もそうです。町の料理教室に通うのと何が違うのか。大根を1分間に切れるだけ切って、「あなたは、1分間に60枚切ったから、1級です。80枚切ったから、特級です」などとやるのであれば町の料理教室の方が、よっぽど気がきいています。材料だっていいし、設備だってぜんぜん違う。家庭科をなくす話ではないのですが、家庭科という教科の意味はないのです。数学もない。体育もない。

熊本はわかりませんが、愛知県では、家庭科の男女共修に関わって家庭科教員養成講座を作りました。高校で、男女とも家庭科をすると教員が足りないのです。でも、家庭科の先生を採用しません。他の教科の先生で、男女問わず、授業に行かずに研修センターで1年間研修を受けると、資格がとれ家庭科の授業がやれるのです。4年間大学で学び、一生懸命研修して、家庭科の授業がやっと出来るようになった家庭科の先生が怒ります。1年ぐらいで目玉焼きの焼き方を学んできて何が家庭科だと。養成講座で資格を取って家庭科

を教える先生と、今までの家庭科の先生とこんな状態です。家庭科の先生を採用すればいいのに採用しないんです。

お金は、あるのです。愛知県は、2人教頭制です。教頭を1人にすれば、3人の先生が雇えるのです。そんな行政の問題もあるのですが、家庭科は、危機に瀕しています。体育だけではないのです。そういう面では、いろんなことで、他の先生と結託できます。

今学校で、授業研究のウエイブができています。毎晩、8時ぐらいまで、青年教師たちと授業の話をしています。組合員は、ちっとも増えませんが、授業の話をしながら職場をつくっていく雰囲気が出ています。これは、ゴルフボールの授業の一つの成果です。半面、反省点もあります。

3. 榊原ショック

(1) 文化研究（資料收拾）と教材研究の区別

榊原さんは、言いました。

「文化から引き出される内容は、子どもから引き出される課題に導かれて、構造化される」

これは、一番新しい「運動文化研究」に載っている原稿ですが、これには、非常にショックを受けました。僕は、文化研究、つまりセントアンドリュースのゴルフボールを集めたり、グッズ集めたり、ゴルフボールを切ったり、ハンカチまで集めたり、色々やりました。そんな資料收拾はしたけれども、それは、教材研究だったのかという反省をしました。

それは、教材研究ではなかった。これは、マニアだ。コレクターとしての仕事はしたけれども、それを教材研究と区別していく必要があると思いました。

(2) 文化そのものは内容にならない

たとえば、孫基禎の問題を例にとって話すと、授業では、民族自決権を教えようと考えます。しかし、孫基禎さんの研究をして授業をしても、子どもにとってはもう50年前のベルリンオリンピックの話です。「それはかわいそうだった」などと思う程度で、何のインパクトもないわけです。民族自決権は、今沖縄の地位協定の見直し問題が起こっているので少しは興味あるかもわかりませんが……。それにしても猿投農林高校の生徒に民族自決権をぶつけても、そんな切実感はないわけです。

それなら、孫基禎の問題も文化研究をして教材研究に変えた場合には……。

例えば、体育祭があります。体育祭で「お前は3年桃組だけど、3年梅組さんのユニフォームをつけて走れるか」という問題から迫ったらどうか。

また僕は、陸上部の顧問ですが、うちの生徒は、猿投農林とユニフォームに書かないんです。はずかしいからだそうです。猿投ならまだ農林までは、いくらやれといっても書きません。例えば、そういう問題から、「君は、猿投農林高校の生徒だけど、隣の進学校の豊田西高校、豊西のユニフォームを借りてきて着れるか」という問いかけをしたら、孫基禎の話につながっていきはしないか。孫基禎さんの話を教材研究として考えたら、そんな話から入れるのではないだろうか。

孫基禎そのものを一生懸命勉強して学んで、それを教えても、あまりインパクトはない

です。それは、資料收拾や文化研究であって、教材研究になっていないからです。この子たちに教える内容として考える時には、子どもたちの課題、日常生活、地域、思いなど、グッとインパクトのある問題から引きずりだしてこなければかけ離れたものになってしまうのです。

だから、孫基禎を教えるとか、ゴルフボールを教えるとか思っていることは、今あの子たちの問題意識とどうからめさせていくのかを研究しないと教材研究にはなっていないと思います。

(3) 結果として「引き回し」の授業

資料收拾したことを子どもたちに教えたくて、教えたくてしかたがありません。でも、ボールの中はどうなっているかは、だれも切ったことがないし興味もないから知りたくもないわけです。そこをあの子たちの興味にどう結びつけていくのかというところに教材研究の一つの鍵があるのではないかと思います。こういう研究がやっぱり教材研究です。

結果的に、教え込みの授業になりました。「切るとこうなっているよ」「ボールは、へっこんでると飛ぶんだよ」「その根拠はこうだよ」「出ていると飛ばないんだよ」そんな話をしました。さっきの作ったボールは、そういう必要から一生懸命作ったのです。

つるつるボールと穴の空いたボールではどちらが飛ぶかを比較できます。これなら、子どもたちは興味があります。実際にやれば、「なぜ、つるつるボールは飛ばなくて、なんで穴が空いているのが飛ぶのかな」という問いかけになってきます。

だけど、今は本物のボールはありますが、本物のつるつるボールはありません。だけど、イミテーションでもこうやって2つ作れば、実際に外で打って実験しながら、教室で体育理論の授業も成立していきます。子どもの思いや興味、関心も結びつきやすいのではないのでしょうか。

でも、結果的にそれをやらなかったのが、押し付けの授業になりました。だから、先程言ったように文化の中身が、彼らの中にドンと当たっているけれど、突き刺しているという感じがしないのです。ボンと突き当たっているけれど、突き刺していないことを強く感じました。

(4) クイズのおもしろさからの脱皮

中村敏雄先生が言われた、「物知りだけをつくることになりませんか」という問いに応えるには、やっぱり突き刺ささないといけない。中村先生への答えになるかわかりませんが、本当に突き刺すということは、その答えの一つとして教材研究と文化研究をきっちり区別をしていくことです。これが、榊原さんから言われたことを受けて少し考えたことです。

4. 「落としどころ」の設定ミス

構想的に言えば、落としどころの設定ミスがあります。先程言いました自然破壊や自然保護とゴルフボールの変化を、ドッキングするのは無理です。これは、別問題と考えています。

ボールが変わったから、自然破壊がおこったわけではありません。ボールが変わるとク

クラブが変わるとか、用具が変わるとか、コースが変わるとかはもちろんあります。特に自然保護にボーンといったのには理由があります。

ゴルフボールの変化と社会的有用性をいろいろ調べていく中で、ヘンダーソンとストリックの「完璧なゴルファー」という本がありました。これは、英語なんです。それを訳しているうちに、すっかり騙された言葉があります。それは、

「そのボールの革新は、すべてのゴルフコースの影響を受けた。それらすべてのゴルフコースは、新しいボールに適應させるために、端までを長くさせられることになった」という言葉です。

「ボールが変わった」「コースが変わった」というこの言葉なんです。これを読んで、「それじゃ自然保護に結び付けちゃえ」と思いました。実は、そうではありません。日本での自然保護は、会員制の問題や一企業がゴルフ場を独占してしまうとかの問題が絡んでいることが後でわかってきます・・・。

この一行だけで、ゴルフボールの歴史と自然保護をすぐに結びつけて考えてしまいました。この間違いに気づいたのです。

V. 今度やるとしたら

1. 内容の構成

では、「今度、授業をやるとすれば」ということで、榊原さんに応えたいと思います。それは「内容の構成」「授業の進め方」という点で、応えたいと思っています。

内容の構成の問題で言えば、まず「ゴルフボールは、どのように変化していったのか」ということが1つです。2つ目に「変化の中身が構造上どのように変化したか」ということ。3つ目は「その変化をつくり出した動機、背景は何だったのか。なぜ、こうしたゴルフボールがディンプルボールに変わったのか」ということについてきっちりと説明する必要があります。

単に、アメリカやイギリスにゴムが来たからということだけではなくて、もっといろんな動機と誘因があったと思われれます。4つ目に、「そういう変化をもたらした社会的・時代背景は何だったのか」ということ。そして、5つ目に、「そのボールの変化が、クラブやコース、あるいはゲームなどゴルフ文化にどのように影響を与えていったか」ということです。6つ目に、「そういう中で現在やるゴルフ文化は、どんな問題を抱えているのか」という6つぐらいの柱で授業を構成できないものかと考えています。

2. 授業の進め方

授業の進め方で言えば、5つのことを考えています。

いきなり「ゴルフボールだよ」という授業ではなく、まず子どもたち一人一人がゴルフについて、どのような思いと関わりを持っているのかなどの疑問や思い、関わりを引き出していきたいと思っています。

2つ目に、突き当てるんじゃなくて、突き刺すためには自分たちで学ぶ必要があります。そのためには、自分たちで調査・研究するということです。つまり、探究型のグループ活動をやらせておかないとダメだということです。

こういうもの（いろんなボールや資料）が準備されておれば、自分たちで実験もでき、

探究もできると思いますのでグループで調査、実験、探究ということを必ずやらせていきたいと思っています。

3つ目に、学習の成果を発表会を通じて、全員に貫流させていくということです。それを進めていくに当たって、グループの代表で、討論するテーマや実験の方法を討議させられるリーダー会議が組織されていくようにしていくことです。

最後に、教材作りですが、危険でない限り、できるだけ子どもにやらせていこうと思っています。子どもたちが本当に喜々としてやるかですが、教材作りも含めて、子どもたちにやらせていこうと考えています。そんなふうに授業をもう1回再構成してみたいと思っています。

VI. まとめ

1. 「教科内容研究」

だからこそ「グループ学習」を

教科内容の研究をしていて、教えたい中身については覚えさせるのではなく、「あっ、そうか」というものを子どもたちの中に落としたいのです。そのためには、子どもたちが自分たちで学ばないと落ちない。学ぶためには、グループ学習が当然必要だということが最後に言いたいことの一つです。「教科内容の研究だからこそグループ学習だ」と愛知支部のニュースに書きました。

よく考えてみると学校の先生は、学校でしか通用しないことを一生懸命やっています。受験学力でもそうです。あれは1ヶ月くらい経つと忘れてしまうのではないですか。1ヶ月も経てばなくなってしまうことを、ギャーギャー言ってやらせるわけです。そんなのを学校と言っていいのかが問われています。

あの子たちが、本当に学校の校門を出ても生き抜いていく、生きつづけていく力としての「学力」を身につけるには、あの子たちが自分の頭で考え、自分たちの手足を使って作り、考えて納得するという授業を創り上げていかなければなりません。今の子どもたちには、とても説教では通じないと思います。

そういう意味において、グループ学習をしない教科内容研究、文化研究をしてもやっぱりあの子たちには腑に落ちていかない。腑に落ちていかないならば、やってもだめです。グループ学習と教科内容研究は、セットで考えていかなければならないことが、本当に大事だと思っています。

愛知支部では「審査基準をつくって、審査委員になろう」という跳び箱の実践が、今出ています。子どもたちは評価される側にいつも立っている。評価という問題を子どもたちのものにしよう。跳び箱はいったい何を教えるのか。開脚跳びこしを教えるのか。いや、そうじゃない。跳び箱は、「技術の分析と総合をふまえた鑑賞表現だ」と捉えた時に評価されるだけではない子ども像が出てきます。自分たちで見る。自分たちが審査員になって審査基準は何かということをしちんと作って表現をしてみる授業です。今、実践がされています。

これは子どもたちの意識を評価される人からする人へ変えていく。単にそれは立場が逆転するというのではなくて、子どもの意識まで変えていこうというものです。グループ学習研究と教科内容研究はセットで考えるべきだと思うし、これは熊本大会の大きなテー

マになっているのもそんな意味だと思っています。

2. あなたに褒められたくて

教員になって、今すごく楽しいと言いましたが、高倉健はご存じですよ。集英社文庫に「あなたに褒められたくて」という文庫本があります。

高倉健が、一生懸命やってきた一番の原動力は、あなたに褒められたくてということなのです。あなたというのは誰かというと、高倉健にとってはお母さんなのです。お母さんから、電話で「何よあなたの演技は」「今日、よかったわよ」「あの服装駄目だよ」などと批判され、反応があるたびに、高倉健は励みにしていったのです。

「あの人に褒められたくて」「あの人に反応してほしい」という思いで授業をしていたり、研究していたりしたら、おもしろいし、やりがいがあります。

1つ文章を書くにしても、あの人へのメッセージというものを内に秘めているとすごく楽しい。

総会で、たのスポの話が出ていましたけれど、たのスポは本当に大変だと思います。今、愛知支部では、こんなことを決めました。たのスポは、原稿料も出ないし、増やすのも大変だし、だけど本当にたのスポを基礎にした支部活動にするにはどうしたらよいか考えました。それには、みんなで反応してあげようということです。

例えば、才藤さんが、実践を書いたら、才藤さんにはがきを一本よこそう。平田さんが今度なにか出したら、平田さんに出そう。そういう反応がやっぱりうれしい。それが、次も書こうという原動力になる。でも、それはやろうと思ってもなかなかできないですから最初は義務でやってみる。愛知では、常任委員会で割り振りをするのです。「この報告については、山本秀人が書く」「これは、丸山が書く」「だれだれに返事をしよう」と。そうすることによって、たのスポが支部と支部を越え、たのスポを中心とした全国的なネットワークが出来るのではないのでしょうか。

そうやってはがきを受け取った人は、「あっこんな人が見ててくれたのか」という思いが湧き、「次は、こんなことを書こう」と気持ちがちがうと思うのです。

だから、原動力は、出世でもないし、お金でもない。あなたに褒められたくてという思いがどこかにあるんだろうと思うのです。

僕は、吉川先生に会うたびに、能登大会で協力したと言っていただけです。本当にうれしいんです。持久走のペースランニングの授業実践で吉川先生と一緒にワークをつくっただけでしたが、吉川先生は、あれから20何年たっても、「あの時に一緒につくったおかげで、また頑張れた」と言ってもらえるのです。そういう言葉が、今の僕に言えるのかなと思います。そういう言葉が、出てくる吉川さんが本当にすごいなと思うんです。

そういう、目には見えない人と人とのつながりみたいなものが、同志会を支えているし、これから活性化させていくものだと思います。お金の面とか大変ですけど、たのスポも「あなたに褒められたくて」、実践も「あなたに褒められたくて」という意味で、ここに見えておられる先生方一人一人が自分なりの「あなた」をつくってみたいと思います。

それは、女房であり、尊敬する先生であり、友達であり、恋人であり、子どもであり、だれでもいいわけです。あの人がどういうふうに反応してくれたのかという思いで実践していたり、勉強していったらと思います。そのためには、やっぱり中村敏雄さんみたい

に反応しなければと思うので、反応し合っていきたいと思っています。